

教育

国語

教育科学研究会・国語部会編

季刊 1985・12 むぎ書房刊

83

条件づけを表現する

つきそい・あわせ文 (三)

— その3・条件的なつきそい・あわせ文 —



言語学研究会・構文論グループ

四つ一般的にいえば、条件的なつきそい・あわせ文では、ある出来事が現実存在しているものと、つきそい文のなかに仮定しておいて、その出来事を原因に、べつの、あたらしい出来事がおこってくることを、いいおわり文のなかにのべている。したがって、つきそい文の述語が「するので」のかたちをとっている、原因的なつきそい・あわせ文が事実的な原因・結果の関係をいいあらわしているとするれば、条件的なつきそい・あわせ文は条件的な原因・結果の関係をいいあらわしている、規定することができる。ここでは、つきそい文のなかにさしだされている、原因としての出来事はまだレアルには存在しておらず、それが実現することもありうるし、実現しないこともありうるということで、ポテンシャルである。したがって、いいおわり文にさしだされる出来事もポテンシャルである。また、つきそい文にさしだされる出来事も、いいおわり文にさしだされる出来事も非レアルで

あることがある。条件的なつきそい・あわせ文のうちの、あるものは、もはや実現することのない出来事をいまかりに存在するものと仮定しておいて、その仮定された出来事を原因に、どのような出来事がおこってくるか、のべている。このような条件的なつきそい・あわせ文にたいして、原因的なつきそい・あわせ文においては、つきそい文にさしだされる出来事も、いいおわり文にさしだされる出来事もレアルである。

大雨がふりつづいたので、すみだ川の水があふれた。(レアル・事実的)
大雨がふりつづけば、すみだ川の水があふれる。(ポテンシャル・条件的)
大雨がふりつづけば、すみだ川の水があふれた。(非レアル・条件的)

条件的なつきそい・あわせ文では、つきそい文に原因としてはたら

く出来事がさしだされていて、その原因のもとにあらたにおこってくる出来事がいいおわり文にさしだされているわけだが、このふたつの出来事のあいだの関係は事実的ではなく、つねに条件的である。したがって、この△条件的な△という用語の意味においては、原因性に仮定性がつきまわっている。条件的なつきそい・あわせ文では、程度の差はあれ、仮定性がつきまわっているのである。ここに表現されている条件的な原因・結果の関係から仮定性をはぎとると、それは事実的な原因・結果の関係へ移行する。条件的なつきそい・あわせ文において、つきそい文がレアルな出来事をさしだしているとすれば、その述語は「すれば」から「するので」によういにおきかえることができるだろう。

この記述においても、伝統的な文法論にしたがいながら、原因的なつきそい・あわせ文は原因・結果の関係をいいあらわしているが、条件的なつきそい・あわせ文は条件・結果の関係をいいあらわしている。と、規定しておく。したがって、ここでもちいる△原因△とか△条件△とかいう用語は、論理学上のカテゴリーである△原因△、△条件△に照応しているわけではない。それぞれが原因と条件とを未分化のままにひっくるめてとらえている。そうしておいて、ふたつの用語のあいだのちがいは、事実性と仮定性とのなかにもとめなければならぬ。このことについては、もういちどききでのべる。

ところで、条件的なつきそい・あわせ文は、つきそい文の述語が「すれば」のかたちをとるものと、「するなら」のかたちをとるものとがあつて、意味的にも構造的にも、かなり、おおきなちがいがみられる。「すれば」のかたちをとるばあいでは、条件になる出来事が文脈、あるいはなしあいからあらたえられていて、その条件のもとに必

然的におこってくる出来事を、はなし手は想像なり判断なりによつてたしかめる。したがって、いいおわり文の位置にものごとたり文があらわれてくるのがふつうである。はなし手は、つきそい文のなかに条件となる出来事をひろいあげるとしても、条件・結果の関係のなかにはたちいらぬ。△私△の意識のそとで進行する、ふたつの出来事のあいだの必然的なむすびつきを確認するのみである。このことから、つきそい文が「すれば」のかたちをとれば、文ははなし手の△私△からとおのいた客観描写になつてくる。ところが、「するなら」のかたちをとるばあいでは、はなし手はとりまく状況、あるいは場面から可能性としての出来事を条件にひろいあげて、その条件のもとに生じてくるみずからの積極的な態度を表明する。条件的なつきそい・あわせ文は、つきそい文が「するなら」のかたちをとれば、おおくのばあい、はなし手の積極的な態度をいいあらわすまじのぞみ文、さそいかけ文がいいおわり文の位置にあらわれてくる。

東京にいけば、あなたは私に本をかってくる。
東京にいくなら、私に本をかってきてください。

条件にひろいあげられる出来事は、はなし手をとりにくく状況、はなしあいのなかにすでに可能性としてあたえられているが、この出来事ははなし手との関係において条件としてはたらくとしても、それ以外ではない。本をよまない私であれば、おねがいもおこらないし、あの手が東京にいくという出来事がおこりうるとしても、そのことは私の態度の条件にはならない。あるいは、はなし手の私とあの手との関係のあり方がたのめる義理でもなければ、そのことは条件にはならない。

だろう。したがって、条件になる客観的な出来事と私の態度とのあいだの関係は、私の計算があつて、はじめてなりたつ。私の内部の事情や私とあい手との関係が計算されて、ある出来事が私の積極的な態度の条件になるとすれば、ここでの条件・結果の関係は私の論理に媒介されている。客観的な出来事は私の論理を通過して、条件へと移行する。ひとくちでいえば、はなし手の私がある出来事を条件にしたてゐる。条件と結果との関係は私の論理でなりたつてゐる。

町へでかけるなら、パンをかってきてください。

あなたがパンをかってきてくださるなら、私は部屋で本をよんでいます。

もっとも、「するなら」のかたちをとるばあいでも、いいおわり文の位置にごくふつうのものがたり文があらわれてこないわけではない。こういうばあい、とくに文脈からぬきだすとすれば、つきそい文の述語が「すれば」であろうと、「するなら」であろうと、意味のうえになんらのちがひもないようにみえてくる。しかし、そうではない。つきそい文のなかに条件としてとりあげられる出来事は、「するなら」のかたちをとるばあいでは、はなし手の想像がつくりだしたものである。だが、「すれば」のかたちをとるばあいでは、それは文脈、あるいははなし手からはなし手にあたえられている。

あの人がくれば、パーティーはにぎやかになる。

あの人があるなら、パーティーはにぎやかになる。

「あの人がくれば……」ときりだせば、あの人があることは、ほぼ

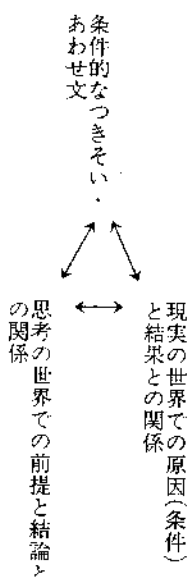
確実なのである。ところが、「あの人があるなら……」ときりだせば、ほんとにくるか、こないかは、まだわかつてはいない。あるいは、こないことがわかつてゐる。確定条件とか仮定条件とかいう用語が正当であるとすれば、ここだけのことであろう。しかし、いずれのばあいでも、程度の差はあれ、仮定性がつきまといつてゐる。さらにすすんで、「するなら」のかたちをとる条件的なつきそい・あわせ文は、はなし手の思考過程を表現しながら、△前提と△結論との関係をさしだすようになる。論理の世界でおこつてくる△前提と△結論との関係は、現実の世界でおこつてくる条件・結果の関係にかならずしも照応しないとすれば、「するなら」のかたちをとる条件的なつきそい・あわせ文では、つきそい文は△条件をさしたすといふよりも、むしろ△前提をさしたすといふほうがたたくる。そこには固有な意味での条件・結果の関係はもはやかけてゐる。

よくうそをつく男だ。これで中学の教頭がつとまるなら、おれなんか大学の総長がつとまる。(坊・八三)

「そんなにひどいことをおっしゃるが、あなただって、はなのあなへしらがはえてるじゃありませんか。はげが伝染するなら、しらがだって伝染しますわ」と細君少々ふりふりする。(言葉・一三三)

つきそい文が「するなら」のかたちをとるばあい、いいおわり文の位置にものがたり文があらわれようと、まちなぞみ文、さそいかけ文があらわれようと、はなし手が自分の論理を展開していくために、つきそい文のなかに条件を設定するとすれば、その条件なるものは△前提であるだろう。こうして、「するなら」のかたちを採用する条件的なつきそい・あわせ文は、はなし手の思考過程のなかにおこつてく

る前提と結論との関係を表現している、と一般的にいえるだろう。はなし手は結論のなかに、したがっていいおわり文のなかに自分の積極的な態度（意欲や意志や期待、命令やねがい）、自分の判断、自分の意見、自分の論理を表現するのである。現実の世界の原因（条件）と結果とのむすびつきは、△前提△と△結論△との関係のなかに間接的に表現をうけている。ところが、「すれば」のかたちをとる条件的なきそい・あわせ文では、その内容に直接あらわれてくるのは、現実の世界での原因（条件）と結果とのむすびつきそのものである。これをはなし手の思考がとらえていることにはちがいがながい、その過程は背景にしりぞいている。



「するの」と「するから」との対立がここでもくりかえされている。つきそい文が「するの」あるいは「すれば」のかたちをとるばあいでは、ふたつの出来事のあいだのむすびつきは、はなし手の意識のそとで進行する、客観的な過程をうつしだしている。しかし、「するから」あるいは「するなら」のかたちをとるばあいでは、それがはなし手の意識のなかで進行する、論理の展開過程をうつしだしている。こうして、条件的なきそい・あわせ文において、「すれば」のかたちをとれば、△私△の意識のそとで進行する、客観的な世界の条

件・結果の関係がさしだされるのであるが、「するなら」のかたちをとれば、私の内部の世界で進行する、前提・結論の関係がさしだされる、ということになる。しかし、つきそい文にさしだされる出来事が、いずれのばあいでも、ひろい意味では△条件的△であるということでは、ひとしい。

第二節 つきそい文が「すれば」のかたちをとるばあい

御つきそい文の述語が「すれば」のかたちをとっているばあい、そこにさしだされる出来事は、はなしあいのなかに、あるいはとりまく状況のなかに可能性としてあたえられていて、まだレアルな存在ではない。これから実現することもありうるし、実現しないこともありうるという意味でポテンシャルである。しかし、おおくのばあい、その実現は確率がきわめてたかく、はなし手はその実現が目のまえにせまっているものとみなして、そうであれば、なにがおこってくるか、かんがえなければならぬ。はなし手はそのような状況におかれているのである。したがって、つきそい文のなかに条件としてさしだされる出来事は、文脈あるいははなしあいはなし手にあたえられている、はなし手のたちばからの仮定性はきわめてよい。つぎの例がこのことをおしえてくれる。

133

九鬼商事は、創立以来の最大の危機に面した。船は暴風圏内にはい

った。現在の経営状態では、いつ不渡手形がでるか、しれなかった。

いちど不渡をだせば、九鬼商事の経済活動はおわりである。下請工場は連鎖反応をおこすだろう。(命・一九二)

134 ……矢つぎばやに動議がだされ、賛否の投票がくりかえされ、だらちとながいが質問がつづけられ、そうしてついにまる一日をつぶした。議会の期間はあと三日だ。その三日をねばりとおせば、法案はながされてしまう。しかし、けっきょくのところ、少数党にちかみはなかつた。(人間の壁・三四五)

135 「三年間島流しになるほくのことかながえてください。そんな持論は、義兄さんひとりの自己満足ですよ。みんなほくに同情します。三年地方に島流しになれば、三年間出世がおくれます。……」(命・六二七)

136 「ほほほ。父は道具を人にみていただくのがだいすきなんですから……」

「ほめなくっちゃあ、いけませんか」

「年よりだから、ほめてやれば、うれしがりですよ」(草枕・四七)

137 「九鬼さんは、金沢においでにはならないのですか」と、新庄蕨子がいった。

「ついで、その機会がなくて……、しかし、せひいきたいとおもっています」

「歓迎しますわ。茶会がひらけますわ。私のようないそがしい人間にも、三十人ばかりのお弟子がごさいます。九鬼さんにきていただければ、みんなおよろこびですわ」(命・五三三)

138 「……もういちどだけあの人にあわせてください。あらためて院さまにおねがいいたします」

「あえば、それだけあなたの心のゆわかくなりましよう……」(苔・一九一)

もっとも、可能性としての出来事は、その実現が五分五分であるばかりでも、つきそい文のなかに条件としてとりあげられる。そういう

ときには、つきそい文のなかに「もしも」がさしこまれて、そこにさしだされる出来事はなし手の仮定であることが強調されている。しかし、このような例はきわめてわずかである。いずれにしても、条件としてあらわれる出来事は、すでに文脈のなかに可能性としてあたえられている。

139 新教委法は、いわば教育における憲法改正である。もしも改正が実現すれば、これを根幹として、日本中の教育行政はぜんぶかわってしまう。日教組も必死だった。(人間の壁・三四二)

140 S 県の役員選挙は全員投票の直接選挙だ。県下六十数百人の組合員のうち、女教師の数は三千人にちかい。綱人部長・長司春子がもしも積極的な支持をあたえてくれれば、わりあい自主性のすくない、自分の確実な判断をもたない女教師たちのなかから、二十票ちかいは自分にあつまるだろうと、建一郎はかんがえた。(人間の壁・二五七)

以上の例からあきらかなように、つきそい文にさしだされる出来事は、はなしあいの中に、あるいは文脈のなかに可能性としてすでにあたえられている。この可能性としての出来事が現実化すれば、どのような事態が生じてくるか、はなし手はかんがえなければならぬ。つまり、はなし手は、はなしあいの過程のなかで、あるいは論理の展開過程のなかで、可能性が現実性へ移行すれば、それを原因にどのような出来事が発生するか、冷静にかんがえることをよぎなくされている。はなし手は条件になる出来事を現実からひろいあげて、つきそい文のなかに配置するわけだが、そうするのは、はなし手の恣意ではなく、はなしあいの展開か、論理の展開がそうさせるのである。

非レアルな出来事をえがきだしているばあいでは、論理の展開過程がいくらかがっている。このときには、のぞましい、あるいはのぞましくないレアルな出来事がすでに存在していて、その出来事にはなし手は非レアルな出来事を対立させている。この非レアルな出来事は、条件さえとのええ、実現が可能であったが、さいわいに、あるいは残念ながら、条件がかけていたためにそうならなかったのである。また、非レアルな出来事をえがきだすことで、レアルな出来事を表現するばあいもある。

141 九鬼はあたりをみた。この茶庭には内腰かけがなかった。^{なまこ}中立のとき、茶室からそこへで、後入をまつのだが、雁亭にその設備がなかった。庭の樹木はしすまりかえった。内腰かけがあれば、鈴鹿をつれこんだらう。(命・三六九)

142 「この子も苦勞をしました」と、魚住泰子は鈴鹿をみつめたまいった。「もつとも、という苦勞か、この子にはなにも報告しません。私が勝手に想像してゐるのです。苦勞がなければ、これだけの陰鬱は感じさせません。気持ちの動きにも、からだつきにも、それが感じられます」(命・三〇七)

143 小生も警察づとめ二十年、ながいあいだとりあつた事件も、われながらおどろくほどたくさん数になつております。おかげで無事につとめてまいりましたが、反面、未解決の事件もけつてすくなくはございます。捜査の反省ともうしますか、いまからかんがえますと、あの事件はこうすればよかつた、ああすればよかつた、とおもうことがすくなくはございます。それがことごとくおしのたらなかつたことに帰結するのでございます。もうひとおししてつっこめば、あの事件は解決したるうちに、とくやまれるのでございます。(点と線・

一七九)

144 雪子は皆をまつすぐのばして、武田校長の顔をみつめた。

「私はそつちよくにもつしあげます。私は、先生方のその初耳主義が、この学校の風を沈滞させている原因のひとつだともいいます。そういうんでなく、学校にはびこっているわるい風習は、そのためにどんなやつかいなことがもちあがるうと、それをとりあげて、根こそぎとりのぞくようにしなければ、けつして学校そのものがよくなつていかないとおもうんですけど……」

雪子のおおくはつた目から真珠のような大粒のなみだがあふれかけていなければ、それらのことは、ひどく武田校長をおこらせたにちがいない。(青い山脈・五三)

ところで、「すれば」をつきそい文の述語にする、条件的なつきそい・あわせ文では、そこにえがきだされている出来事がポテンシャルであることもあるし、非レアルであることもある。そして、このふたつの意味的な対立は、いいおわり文の述語が△すぎさらず△のかたちをとっているか、それとも、△すぎさらず△のかたちをとっているか、ということによって表現されている。いいおわり文の述語が△すぎさらず△のかたちをとっているばあいから記述することにしよう。

例「すれば」のかたちをとっている条件的なつきそい・あわせ文においては、いいおわり文の述語が△すぎさらず△のかたち「する」であれば、そこにえがきだされる出来事は、未来にかかわるポテンシャルな出来事である。つまり、つきそい文にさしだされる、ポテンシャルな出来事がレアルなものに移行すれば、その条件のもとにおこりうる出来事である。そして、この出来事が想像あるいは思考によってと

らえられたものであるとすれば、想像や思考の過程のなかに存在しているものであるとすれば、いいおわり文の述語が「おしはかり」のかたち「……だろう」を採用するのは、とうぜんのことである。いいおわり文にさしだされる出来事は、はなし手の「おしはかり」がとらえたものである。さらに、このおしはかりは、はなし手の確信度に応じて、「……ちがいない」「……かもしれない」などに分化している。

a いいおわり文の述語が「……だろう」をとるばあい

145 山路はさっさと二階にあがっていく。朝子はうんと自分をそまっけに、乱暴にあつかつてみたい誘惑を感じた。ぬきすてられた靴に手をつけたが、いつものようにげた箱にしまう気にならなかった。宗珠がはいってくれば、まっさきに男靴に目がつくであろう。かまわなかった。すでに知られていることだとおもう。(著・二五九)

146 「いいえ、仏応寺はまともなおよめさんをのぞんではおりません。それに子どもであります。仏応寺の事情をすれば、たいていのひとはしりごみをするでしょうから」(著・三八二)

b いいおわり文の述語が「……ちがいない」をとるばあい

147 しかし、いったん両親に抱いた、いやな気持ちちは消えなかった。祖母父母が孫にたいする愛情をみとめないというのではない。井之頭公園にかよつたのしみがわからないではなかった。自分がこの家をでてしまえば、関係のない、ひとこととなり、ほほえましい光景とおもうにちがいないのである。が、いまはこまるのだ。(命・三八七)

148 キス・シーンに異常な興味をもったのは、それがおもしろいというよりも、そのことに心をむけることによって、自分の不幸を忘れていなかったのではないだろうか。家庭のなかの不幸がなくなれば、異常

な性的興味も自然に消えてゆくにちがいない。(人間の壁・二二五)

c いいおわり文の述語が「……かもしれない」をとるばあい

149 手がえしをする人は油断がならなかった。ふたりの呼吸が一致しなければ、うまいもちはつかなかった。どちらかが間をはずせば、手がえしをする人の手をつかないともかきらない。きねをもつ手がすべれば、細君の頭をうちおろすかもしれないのである。(著・三八四)

150 宗珠の心もちとは、とおくにかけはなれている。肉体と精神が均衡をやぶる年齢にみね代はさしかかっているのである。ふたりの心の距離がわかれば、みね代は絶望のあまり、気がくるいだすかもしれない。(著・四六七)

このつきそい、あわせ文が思考過程そのものを表現しているということは、この種の文をつつみこんでいる「……とおもう」「……とかがえる」「……という」のような述語が存在していることによってあきらかである。さらに、日本語は、いいおわり文が思考過程から生じている結論の表現であることをさししめす、さまざまな形式をもっている。

151 おれのきたのをみて、おきなおるがはやいか、坊ちゃん、いつうちをおもちなさいませ、とこいた。卒業さえすれば、金が自然とポケットのなかにわいてくる、とおもっている。(坊・一四)

152 しかしまた、かれはせつかくくるという信行をそんなにすることわったことが気になりました。かれは、きてもらうかわりに、こっから出かけようかともまよったが、それを断行するだけの気力はなかった。そして、あえば、かならずすべてをうちあげるだろうとおもうと、

それだけでも、いまはあいたくなかった。(暗夜・後・一八六)

153 わたしは、義母の執心を拒絶すれば、すぐわれるとかんがえていた。そうすることが正しいとかんがえていた。(吾・三三〇)

154 最近、アメリカで院内感染が問題になり、日本でも学会でちょっと流行になったが、これも、患者のたちばにたてば、もつとべつなことをかんがえつくはずである。(生命の・一〇二)

155 また、満員のデパートに急な火がおこれば、階段が人間ですしづめになつて、閉鎖してしまふおそれがある。(寺田 4・六一)

156 さつきラジオで牡丹江といつていたが、さいごに浩四郎のいたところは牡丹江である。どうしているかな、生きていてくれさえすれば、あえるのぞみもある……。(めし・二九)

だが、この種の条件的なつきそい・あわせ文において、いいおわり文がいいいきりのかたちをとっていることもある。結果として生じる出来事がうたがう余地のないものであれば、いいおわり文はいいいきりのかたちをとるのがふつうである。さらに、いいおわり文にさしだされる出来事の成立がはなし手にとって確信的であれば、おなじようにいいいきりのかたちをとっている。もっとも、いいおわり文が意志表示的な意味をもっている一人称文であれば、いいいきりのかたちをとるのは当然である。

157 「わたしも仏応寺大事とかんがえているひとりですよ。あの丘の墓地を処分すれば、まとまった金が寺にはいる」(吾・三二五)

158 留車がきて、それにのつてしまえば、いやおうなしに丹阿弥市にはこぼれていく。(吾・四二二)

159 絶望と悲しみが宗珠のからだのなかに沈下していく。その悲しみ

は、また朝子にたいする思慕にも通じていた。——あの人が山路のいつけにしたがつて仏応寺の僧徒をやめるのではないか。いうことをきかなければ、あの人の生活はとりあげられる。

当然かんがえられることである。(吾・四〇四)

160 「……気軽に相談にくるような子ではありません。母親が生きていたら、そうでもないでしょうが、もちろん、相談ごとになれば、あの子はここにきます。まちがっても田園調布にはまいりませんよ……」(命・二〇五)

161 「なければ、どこからそのうたがいでてきたんです」

「もしうたぐるのがわるければ、あやまります。そうして止しま

す」(明暗・下・二八〇)

162 「たいして用もないだろう」

「用があれば、電話をかけるよ」(命・三八)

163 しかし、この種のつきそい・あわせ文において、いいおわり文がいいいきりのかたちをとるとすれば、圧倒的におおくのばあい、反復・習慣的な動作が表現されている。ここでは、条件としてはたらく出来事がくりかえしおこつていて、その条件がととのいさえすれば、いいおわり文にさしだされる出来事が規則的におこつてくる、という事実がつたえられているにすぎない。したがって、この種のつきそい・あわせ文では、私のたちはからの仮定性はきえていく。

164 どこまでも自分の生き方は太郎冠者のであり、中心へでて自分へ何かやってみようというフアイトはない。妻がなににうえているかも考えてみたことはなさそうである。

△村からもどつてくれば、妻の顔をみるなり、つかれたという。眼

にみえて行儀がわるくなり、すぐねころぶ。(めし・一八一)

164 女の生理を悲しがり、腹をたてながら、一方ではこっそりとそんな生理にみたされているのではないか。宗珠がそれと知ったならば、なんとおもうだろう。山路の愛撫に別人のようになる自分をつたならば、宗珠は幻滅するにちがいない。それでいて、山路がかえれば、朝子はつきとばされたようにきびしくなり、わが身をのろいじめる。腹をたてる。宗珠によってくいのない生き方をしたいとあこがれる。

一人二役である。(音・四六一)

165 堅町の四つ角までくると、こんどは山嵐にでつくわした。どうもせまいところだ。出であるきさえすれば、かならず誰かにあう。(功・三三)

166 「この節はなんでも母さんのまねばかりしてるんですよ。母さんがねれば、ねるまねをするし、おひつをだせば、ごはんをつけるまねをするし……」(家・上・一三四)

167 「この子は若者さえみれば、駒子ちゃんって、しりあがりによぶの。写真でも絵でも、日本髪だと、駒子ちゃん、だって……」(雪国・六四)

168 「雨がふれば、娘がむかえにきてくれます。夜は村の人をもむの、もうここへはのぼってきません。……」(雪国・五〇)

この種の、条件的なつきそい・あわせ文では、一回きりの動作・状態とくりかえされる動作・状態とが対立しているが、さらに具体的な動作・状態と一般化された動作・状態との対立がかんがえられる。「すれば」のかたちをとる条件的なつきそい・あわせ文は、一般的な法則をも表現しているのである。つまり、特定の具体的な物ではなく、物のクラス、クラスに属するすべての物が、あたえられた条件のもとで、法則的にならずそうなるという事実を表現している。この

種のつきそい・あわせ文では、いいおわり文の述語は、動作・状態の一般化が進行するにつれて、じょじょに具体的な動作・状態がもっている時間から解放されて、つねに「する」のかたちを採用するようになってくる。

169 さらに制度の面からみると、国民皆保険なのに、僻地では医師にかけられない、大都市でも夜間や日曜になれば、開業医がみとくれない。無医地区とおなじだといわれている。(生命・二二七)

170 女子社員には、会社と運命をともにする気持ちはない。給料のよいところがあれば、どこへでもうつていく。(命・一八七)

171 「そんなケチくさいことをいうな。そりゃ、今日のわれわれの境涯では、ひとつきの月給がひと晩もさければ、きえてしまふさ。それがきみ、なんだ。一かく千金をゆめみる株屋じゃないか……」(家・下・八二)

172 「半蔵、なんにもないが、お客さまに一杯あげる。ごらん、お客さまという、こどもがおおはしやぎだよ。にぎやかでありさえれば、こどもはうれしんだね」(夜あけ前・下・一五八)

173 「きみが家をもったら、亭主はしかられどおしだね」
「なにもしかりやしないじゃないの。せんたくするものまできちんとたたんでおくと、よくわらわれるけれど、性分ね」

「たんのすのなかをみれば、その女の性質がわかるっていうよ」(雪国・五七)

174 「こどもはなくものとむかしのひとはおもっていた。なくことによつて、あかんぼうは成長するものとおもっていた。が、一定の時間をきめてたべさせておれば、あかんぼうはけつてなかないのだ……」(命・四九八)

175 ここへきてみると、人と牛との生涯がほとんどまじりあっているか

176 のようである。この老爺は牛が塩をなめて、清水をのみさすれば、病もいえる、ということまで知りつくしていた。(千曲川・一五)

176 雨風がふけば、浅間山の雪がとけ、西風がふけば、鳥の背姿が熟する。これは小使のわたしにはなしたることだ。(千曲川・一八)

この種の表現が固定化して、くりかえしもちいられるなら、慣用的な表現へと移行する。

177 山道をのぼりながら、こうかんがえた。

智にはたらけば、角がた。情にさおせば、ながされる。意地をとおせば、きゅうくつだ。とかくに人の世は住みにくい。(草枕・五)

178 へたな鉄砲も、かすうてば、あたる。

229 「すれば」によって表現される、条件的なつきそい・あわせ文が反復・習慣、一般的な法則の表現手段になるということは、この種の条件的なつきそい・あわせ文においては、条件・結果の關係の成立のなかにはなし手の主観がはいりこんでいないことをものがたる。はなし手はある条件のもとにおこりうる事態を確認するのみである。ところで、いちいちの具体的な出来事のあいだの条件・結果の關係をさしだすばあい、条件になる出来事が場面、あるいは状況のなかに、はなしあいのなかに、すでに現実性としてあたえられていることがある。つまり、条件になる出来事は、ふつうはその実現の確率がきわめてたかい可能性としての出来事なのであるが、ここでは、それがレアルな出来事なのである。はなし手はそのレアルな出来事を条件にとりあげて、その条件のもとにながおくるか、確認する。こういうばあいで、条件的なつきそい・あわせ文は原因的なつきそい・あわせ文にう

かづいていく。

179 「おまえとわかれることはつらい。たかが女の問題でこんな気持ちになろうなんて、考えたこともなかった。こんな告白をすれば、おまえはますます増長するだろう。しかたがない、ほんとうの気もちだ。」(吾・五三)

さらにすすんで、つきそい文にさしだされる出来事がすでに確認されているレアルな出来事であれば、ふたつの出来事のあいだの關係は、条件的であることをやめて、原因的なものになる。したがって、つきそい文の述語は「するので」におきかえることができる。つきにあげる例がそうであるが、たくさんあるわけではない。原因になる出来事を条件として表現するには、それなりの理由があるにちがいない。現実性を可能性としてえがきだすとすれば、直截さはさげることができ。あるいは、具体的な原因・結果の關係を一般的な法則のなかにとらえているのかもしれない。つまり、具体的な現象に一般的な法則をあてはめている。

180 「家のしまつさえつけば、あすにもでかけたいとおもってる」

「あとはどうにでもなるさ。わしもおれば、三吉もおる」

「むう——ひきうけてくれるか——ありがたい。それをおまえたちが承知してくれさえすれば、おれは安心してたてる」(家・下・九〇)

181 ふろのなかでまちかねているのが、鈴鹿にはいまましい。鈴鹿ははいると、湯船のふちにしゃがみ、湯をくみだし、からだをぬらした。

「すぐなかにはいらず、そこになって、ふせてくれないか」

鳥居はにやにやする。鈴鹿は命令にしたがわねばならなかった。モデルではないのだ。自然とからだがおれまがるのはいたしかたがなかった。身にまとうものがなければ、腰をつきだすわけにいかない。タオルひとつでは身のまわりようがなかった。(命・二二〇)

182 体育の時間や休みの時間に黒野田ふみ子がグラウンドにでてゆくと、一番はじめにかの女をみつめて、かげよってくるのが浅井だった。教室のなかではおられないほど人なつこい顔をして、はずかしいので、すこしまぶしそうな眼はたきをしながら、そつと先生の手をにぎる。

この子はただ先生の手をにぎっていたのだ。先生の手をにぎってあれば、孤独がなぐさめられるのだ。(人間の壁・二〇〇)

183 結局、あの人にとってわたしはなんでもない存在であるのかもしれない、とおもう。かれの愛情を証明するよううれしい思い出をさがしてみても、思ひだすことがないのだ。愛されていることの証明がなければ、妻の心はまよいはじめる。一生このままで生きていくのかとおもうと、ためいきがでる。(人間の壁・一五五)

184 ここてたいせつなことは、ふたつの、具体的な、リアルな出来事のあいだの関係は原因のであるとしても、条件的にはならないということである。したがって、条件的なつききい・あわせ文において、いとおわり文の述語が必ずききりのかたちをとりながら、具体的なリアルな出来事をさしだしているようにみえても、けつしてそうではない。じつさい、いとおわり文が必ずききりのかたちをとりながら、いちいちの具体的な出来事をさしだしているとすれば、その出来事は非リアルである。この種の条件的なつききい・あわせ文では、は

なし手は期待する、あるいは期待しない非リアルな出来事をリアルな出来事からひきずりだす。そして、リアルな出来事に非リアルな出来事を対比させるのだが、それが裏がえしの表現であれば、はなし手の安堵とか残念さの表現になる。あるいは、また、リアルな出来事を直截にえがきだすことをさけて、非リアルな出来事をえがきだすことによって、リアルな出来事を表現していることもある。したがって、仮定性はつよまってくる。その仮定性を強調するために、かならずしもつねにそうではないが、「もし」、「もしも」のような陳述副詞をともなうことがあるのも、この種の文の特徴である。

184 「風の日も雨の日も、熱心に九鬼商事の玄関にかよった。あれほどかよえば、きみが心をうごかすのは当然だ。それを勘定にいて、かよってたんだ。予定よりはすこしながくかかったが、それだけきみは大切だったんだよ。まともに求愛すれば、鼻のさきであしらわれたにちがいない。ながいながいしんぼうのすえに、やつときみを陥落させたのだ。……」(命・九七)

185 「伸子と一度ゆっくり話しあいたいとおもうのですが」

「それはむだでしょう。いまだはあなたのことをわすれて、あそびまわっています。あなたの仕事がうまくいっておれば、伸子はいい奥さんになれたにちがいない。そういうばあいだけがあなたの子にふさわしいのですから」(命・五二三)

186 十時ちかくになり、九鬼が玄関をでると、遠いかけのように追った鈴鹿がからだをぶつつけた。はげしくおしつけて、心をあらわした。九鬼は両手で鈴鹿の顔をかかえた。幼い子に口づけするように、いたるところにくちびるをおしあてた。鈴鹿はうめいた。しつかりとすがりついていたければ、地面にしゃがみこんだかもしれない。(命・三

六八)

187 「総代というのはつらい立場だ。館さんももし私の位置にたてば、

188 半分をうしなだらう」(善・三八九)

もしこのとき板太郎の発言がなければ、富永は命じられるままに退場するしかなかったであろう。(青い山脈・一七〇)

187 基地獲得のためには、地上部隊による占拠が必要であると同時に、海軍にとって上陸部隊の撃破は艦隊撃滅と同等の重要性をもつといえるのである。

もしこの作戦が成功していれば、レイテ島に上陸したマッカーサーの第六軍は後方との連絡をたたえ、その補給計画はおおはばに狂い撃滅されたかもしれない。(レイテ・一七九)

そして、この種のつきそい・あわせ文では、出来事が虚構であれば、いいおわり文の述語が「あおしはかり」のかたちをとるのも当然である。「あおしはかり」のかたちをとらず、「あいいきり」のかたちになつておれば、はなし手の確信を表現している。あるいは、うたがう余地のない、あたりまえのことであれば、「あおしはかり」のかたちを探用しない。

190 「いいえ、朝子はご院さまをあきらめません」

「もっとはやくこの問題に気がつけば、とりかえしのつかないこと

もおこらなかつたのです」(善・五三四)

191 うけもちの先生の名まえで蓮子によびだしの手紙をかいてもらつた。良薫のことについて、至急相談したいことがあるという口実であつた。そうした理由がなければ、蓮子は家をでることができなかった。(善・五〇八)

192 一定のリズムをもった健康な音が庫裡中にひろがった。良薫は台所

にすわって、つき手をながめ、手がえしをする細君の力んだ表情をみつめる。手がえしをする人は油断がならなかつた。ふたりの呼吸が一致しなければ、うまい餅はつけないかつた。(善・三八四)

193 「爆薬の導火線の火繩をメートルにしておけば、あの鉄条網を爆破して、安全にかえることができたんです。それが、あやまって、五十センチ、すなわち半分にしてしまつたんです」(ある昭和史・四七七)

過去における反復・習慣的な動作・状態も、この種のつきそい・あわせ文によって表現されている。ある条件のもとでは、／かならずそうなつた／ということが表現されているとすれば、ふたつの出来事のあいだの関係は条件的であるとしても、仮定性はきえていく。

194 「馬鹿——」としかられても、お母はやはり母のふところを蒸つた。そして、出なくてもなんでも、乳房をくわえなければ、眠らなかつた。(家・上・一三九)

195 ……ともかくなじんでいくうちには、それぞれしたしみをもつようになったが、道雅にかぎっては、長くいれるほど、かれがいなかったら、さぞほつとするだろうかと、感じられるばかりであつた。道雅はものおしみがひどく、食欲が旺盛で、奉公人にはけんどんだつた。食物が出れば、うえたことのようにがつがつたべるし、口をきけば、いやなおいのような不愉快さをかならずあいつになすりつけた。(女坂・八二)

196 そのときの妻は入浴のしたくをしていなければならなかつた。わが家では、浴をかけなければ、妻は動かなかつた。昌代の家では、声をかけなくとも、すすんではいつてきた。(命・五五六)

197 かれば、天気がよければ、たいがい二、三時間は阿弥陀堂の縁でくらした。(暗夜・後・二一九)

198 仲子のモデル写真がほうほうの婦人雑誌にけいさいされた。気がむけ、ステージになった。自分の人気をたかめようという気持ちはずしもなかった。(命・一〇三)

199 築地の料亭胡竹の請求書は、土地柄だけに、たかいはいたしかたがなかった。たかいのを承知で客はかよった。半月もまえに予約の申込みがなければ、胡竹の客となることができなかった。(命・一五二)

しかし、いいおわり文の述語がへすぎざりのかたちをとっているばあいでも、ポテンシャルな出来事をいいあらわすことができないわけではない。このばあいは、文脈のなかにテンポラル・センターが設置されていて、その座標軸からみて、さしだされている出来事がポテンシャルなのである。このポテンシャルティは、いいおわり文の述語の位置にあらわれてくる複合テンスによって表現されている(例の200、201、202)。なお、いくつかの表現方法があるようだ。

200 他日の逃げ口上まで鳥居は用意した。鳥居は鈴鹿に請求書をわたしたとき、この問題が解決したとおなじ気持ちになった。あとは鈴鹿の責任であり、努力にかかる。失敗すれば、鈴鹿がせめられるだけであつた。(命・一五六)

201 しかし、収入のすくない先生たちは宿直手あてをうしないたくなかつた。その分で三合の酒をたのしむこともできる。ゆりのない生計のなかから、映画をみたり、コーヒーをのんだりする費用をうみだすことにもなる。第一、宿直がなくなれば、こうしてくつろいだ夜のつどいをする機会と場所とがなくなるのだつた。(人間の壁・一二二)

202 金額払いがいまいましたければ、鳥居自身でのりこめばよいのである。はずかしい交渉であることは鳥居も承知である。その恥を妻と肩

がわりしたいのである。恥をかかねば、いまいましてはとりかえせないのだつた。鳥居はいまいましてをとりかえすことだけを考えた。(命・一五五)

203 九鬼は管理部長をよしかえった。そんなものがあるだろうか。堀はこれさいわいと、九鬼商事をはなれていくだけである。メーカーの強みだった。堀としても、直接スイスのエルンストと交渉がもてるようになれば、九鬼商事の世話になる必要がなかった。(命・三二六)

204 下請工場の主な四社は九鬼商事の手形をうけとり、わりびいて事業資金とした。九鬼商事が倒産すれば、これらの手形を銀行から買いもどかねばならなかった。(命・三二九)

205 そうだ、と植子はおもった。立川にいて、葉山警部補にもう一度あつてみよう。立川署の、夫の旧同僚にきけば、夫の過去のなかが聞けそうであつた。(ゼロの・二九四)

また、いいおわり文の述語がへすぎざりのかたちをとりながら、そこにさしだされる出来事が現在にかかわっていれば、その出来事は非リアルである。このばあい、いいおわり文の述語のあとに、「だが」「けれども」「のに」のような終助詞がくっついていなければならぬ。一般的に、一回きりの具体的な出来事が過去あるいは現在にかかわっているときに、条件的なつきそい・あわせ文は非リアルな出来事の表現になる。

206 「ああ、いい気持ちだ。これで道路がよければ、快適なドライブなんだがな……。のどがかわきませんか。……」(青い山脈・一二五)

207 山嵐は冷然とおれの顔をみて、ふんといった。赤シャツの依頼がなければ、ここで山嵐の卑劣をあばいて、おおげんかをしてやるんだが、

口外しないとうけあったんだから、動きがとれない。(坊・五六)

206 校長はにっこりして、「このおんでは、あすも雨かもしれないね」といった。かれは茶色のスリッパをはいていた。……

「そうですわね。晴れば、あたたかくなるんでしょうけど……」
(人間の壁・一〇)

207 坂本町でおりると、きたない公園が目まににあった。金でもあれば、水のいっぱいのもんでいくのだけれど、ああこのジトジトした汗の体臭はけいべつされるにちがいない。(放・一六六)

210 「お出かけですの」
「この近所の名所旧跡をひまにまかせて見物してあるくことにきめました」と、姑がこたえた。

「そうおっしゃってくだされば、ピクニック用のバスケットを用意しますのに」(命・一二三)

211 「お前はおそろしいことをしてくれた。だまっておきさすれば、もはや知れずにするむことではないか。だまっておきさすれば、お前はいい親戚としてとおり、いい叔父さんとしておっているではないか」(新生・下・二五〇)

ここでは、たぶん、ポテンシャルな出来事と非レアルな出来事とが接触しているといえるのだろう。このことをつぎの例がもがたる。例212では、あうことがまったくありえないとみれば、非レアルである。まだ可能性があるとすれば、ポテンシャルである。213の例では、終助詞の「のに」のありなしがポテンシャルであるか、非レアルであるかをきめる。

212 どうにもならぬとおもいながら、夜ふけの道をあの人があんばんを

いっぱいかかえて、かえりそうな気がしてくる。かすかにあしおとがするの、わたしははだしで外へでてみる。雪かとおもうほど、まわりは月の光りであかるい。関節が痛いほど、寒い。ぱったりと戸口でふたりがあえば、どんなにうれしかろう。(放・三七二)

213 「なにがニュースだ。おまえもおどりにつれていくな、夏服のひとつくらい買ってやれよ」

「へええ、おとうさん、恥をかいたんですか」

「どうも、ブラウスとスカートとちくはぐらしいんだな」

「なにかもってますよ。突然つれてらっしゃるから、わるいんです。まえから約束しとけば、なにかきてきますよ」といって、修一はそっぽをむいた。(山の音・四四)

212原因的なつきそい・あわせ文が事実的な原因・結果の関係を表現しているとなれば、条件的なつきそい・あわせ文は条件的な原因・結果の関係を表現しているわけだが、条件的なつきそい・あわせ文も事実的な原因・結果の関係を表現することができる。このばあいは、つきそい文の述語が「であれば」「となれば」「であってみれば」「すればこそ」のような特殊なかたちをとっていて、文体的にはふるめかしいいいまわしになる。事実的な原因・結果の関係であれば、「するの」にいいかえることができるのだが、そうすれば、ふるめかしさがきえてしまう。そして、条件的なつきそい・あわせ文が事実的な原因・結果の関係を表現しているとすれば、そのいいおわり文は、とうぜんレアルな出来事をさしだしていなければならない。原則として、条件的なつきそい・あわせ文はポテンシャル、あるいは非レアルな出来事をさしだして、ふたつの出来事のあいだの原因・結果の関係は、つねに条件的でなければならないのだが。

214 つまり、王臣家の勢威をできるだけおのれの力の伸張に利用しようとしていた。庄の所有者からいえば、かれらは欠くことのきぬ要員であった。在地の有力者であれば、庄内の寄住人を十分におさえることができた。それらの庄は、浮浪人だけではなく、むしろ、よりおおく周辺の農民の力をかりねばならなかった。庄長が庄のために人手をそろえた。(日本の歴史・九四)

215 三吉はすこしうるさそうに、「じつはばくはひとりでありたい。それにひとの細君なぞをつれていくのも心配だ」

「心配だともうなら、よすがいいぞや」とお種がいった。

「なんでもわたしはついてく」と豊世は新座敷の方から。

「じゃ、汽車にのるところまで、おくってあげよう」と三吉もひきうけた。

いよいよわかれるとなれば、よけいにお種は眠れないふうであった。その晩、姉は奥座敷に休んで、弟といっしょにおそくまで話した。

(家・下・二二四)

216 そこで、わたしはきみをわたしの心やすい宿屋に紹介する。宿屋では、わたしにたいする信用できみをとまらせて、食わせておく。その間に、わたしはきみのために位置をもとめる。それも、きみだけの材木があつてみれば、多少の心あたりがないでもない。もし、うまくいったら、きみはみずからかちえた報酬で宿屋の勘定をすらい。

(山椒木夫・一七四)

217 ようやく三吉も力をえた。田頃義理ある叔父とおもえばこそ、どうして働きにきてくれると、お俊の心をあわれにもおもった。(家・下・六二)

いいおわり文がリアルな出来事をさしだしているとすれば、つきそいい文の述語が特殊なかたちをとらなくとも、事象的な原因・結果の関

係をいいあらわすようになるといえそうである。つきにあげる例がそういうものであるかもしれないが、このような例はほとんどみあたらない。

218 なにも、これだけの財産があれば、側室をいそぐことはないのだ。(命・四六六)

219 「お前の気持ちこそごまきまわってれば、なにもいうことはないが……」(暗夜・前・一九四)

220 こんなくだらぬことを赤白両派にわかれて、両方でいいあつていれば、秋の夜長にもはなしの種はつきそうもない。(寺田・四・二二〇)

333 条件的なつきそい・あわせ文は条件的な原因・結果の関係を表現していると、いままではそのように理解してきたが、つきそい文にさしだされた出来事は、論理・意味的な観点からみれば、かならずしも原因であるわけではない。それが、いいおわり文でさしだされる出来事が成立するために必要な条件であることもある。条件という用語は、原因がはたらくにあたって必要な環境／という意味に理解しておこう。ここでの原因とか条件とかは、論理学上のカテゴリーであつて、文法的な意味として、文法的な表現手段のなかに固定されているわけではない。したがって、また、文法としてはこれらを区別する必要もない。つきそい文にさしだされる出来事が、いいおわり文にさしだされる出来事の進行する状況であることもある。また、継続的におこってくるふたつの動作・状態がこの種のつきそい・あわせ文のなかにえがかれることもある。

a つきそい文が原因をあらわしているばあい

b

つきそい文が△条件△をあらわしているばあい

- 221 こういう今日の新教育がすすんでいけば、資本主義政であるところの自民党はおからず衰微する。(人間の聲・三一六)
- 222 日は暮れてきたが、海岸方面の砲声と自衛小銃の音はたえない。ここに兵力を結集しなければ、この時は明日にも突破されてしまう。(レイテ・三七九)
- 223 友だちの声は半分ないていた。友だちを絶望にひき入れたのは、良蕪の責任である。胸さわぎがする。だれもしらないうちに、ふたりの少年が死んでしまうのである。上手からどつと水が流れてくれば、あつという間にふたりは土管のなかで死んでしまうのだ。(昔・二三五)
- 224 丘の墓を始末すれば、まとまった金が仏心寺にはいる。その金を院主はなにに使ってもよろしい。その金を後妻をもらう費用に使ってもよいのだ。(昔・三一六)

225 「でも、その主義でなければ、事業家としては失格でしょう。成功すれば、いくらでも仏さんの顔になれるのに、うちの宿六、いまから仏さんをまねてるのよ。……」(命・一二二)

226 肉片を指にはさんでちかづけると、憤然とかみつが、いつまでもくちばしにだらりと肉をぶら下げたまま、のみこもうとはしない。彼は夜のあけるまで、意地くばりの根くらべをしたこともあった。彼がそばにいれば、横断をみむきもしない。(伊豆の・一四八)

227 毎日のように公園にきておれば、ほかの散歩者と顔なじみとなる。しよつちやう顔をあわせておれば、いつか、どちらからともなく、会釈をかかずようになる。(命・三四一)

228 私が死んでしまえば、誰よりもおかあさんがこまるのだもの……。 (放・二五一)

229 「……はくは、つよくなっている。側座がぼくをこんな人間にし

た。ぼくは、素手だ。ぼくはいま、なにももっていない。なにももっていないことは、なにもものもおそれないことを意味する。先生がえらなければ、ぼくは今夜はとまっていたくもりでした」(命・五九四)

230 けちなやつらだ。自分で自分のことがいえないくらいなら、てんでしないがいい。証拠さえあがらなければ、しらをきるつもりで、ずぶとくかまえてやがる。(坊・三六)

しかし、「すれば」のかたちをとる条件的なつきそい・あわせ文において、そこにさしだされている出来事がレアルであるとしても、かならずしも事実的な原因・結果の関係をいあらわしているわけではない。ふたつの、レアルな出来事のあいだには、原因・結果の関係がかけられていることがある。こういうばあいでは、つきそい文にさしだされる出来事は、いいおわり文にさしだされる出来事の進行する、たんなる△状況△としてはたらいっている。したがって、ここでは△条件△ける△と△条件△づけられる△との関係はうすらいでいく。このような、ふたつの出来事の間を意味的にとらえるとすれば、ひとつの動作・状態が進行しているときに、べつ、もうひとつの動作・状態が随伴的におこってくるということになるだろう。

c つきそい文が△状況△をあらわしているばあい

231 翌日眼がさめると、頭がだいぶかるくなっている。ねていれば、ほんとに常体にかかっている。(三四郎・二五三)

232 姉は潮をくみ、弟は柴をかって、一日一日とくらしていった。姉は涙で弟をおもい、弟は山で姉をおもい、日の暮れをまて小庵にかえれば、二人は手をとりあつて、筑紫にいたる父がこいしい、佐賀にいたる母がこいしい、といっではなき、ないてはいう。(山椒太夫・一五〇)